

大人になってゆく子ども

成長発達のリズムと教育(中)

伊藤隆二

——思春期以後——

十五歳以後の成長発達を考える

卵—幼虫—蛹—蝶という変化発展過程をモデルにおいて人間初期の成長発達を追うと、誕生から三歳ごろまでは「卵」、三歳ごろから十五歳ごろまでは「幼虫」、十五歳ごろから十八、九歳ごろまでは「蛹」、そして十八、九歳ごろから「蝶」に変態し、「社会」という名の広い世界へ飛び立っていく——とみることができるようである。

「卵」の時代は養育者との共生を中心にすえている。「幼虫」の時代は集団参加を通して、外界へむかう限らない活動を中心にすえている。では、「蛹」の時代はどうであろうか。私見では、それまでの活動をとおして仕入れた諸々の情報を整理し、さてそれをどうまとめるか、また将来にむけてどういかしていくかといったことを思索するときだと、考えて

いる。外界へむかっていた限らない活動はやや鈍り、子どもたち（いや、もう青年とか若者とよぶべきだろう）は、自分以外の対象にむけていた関心を、自分自身の内面世界へむけていく。かれらは文字どおり、蛹のように「自分の世界」という殻のなかにとじこもり、じっと身動きしなくなる。とくに、親の干渉をきらう。へたに干渉すると猛然と反抗することもある。一日中、自分の部屋のなかにとじこもっていることも珍らしいことではない。

肉体的には、もうおとなの水準に達した息子が一日中、ものもいわず、じっと部屋にとじこもっているのをみて、ある母親は「自分の子どもながら、薄気味が悪い」という感想をもらしているのをきいたことがある。

また、衝動的とでもいうべきか、かれらは突如として、ボリュームいっぱいあげたジャズ音楽にききほれたり、ある

いは戸外に飛び出して猛烈なスピードでオートパイをとほしたりすることもある。

「蛹」の時代の若者は、一見、心静かな、平安なときをすごしているようにみえるが、決してそうではない。心にはたぎるような何かを感じ、何かをしようと疼いているのである。

この衝動的ともいえる暴発行動をみて、「疾風怒濤」と表した人もいる。では、かれらは何を感しているのだろうか。

それは空高く飛翔している自分の姿かもしれない。あるいは寝食を忘れてライフワークにとりこんでいる自分の姿かもしれない。何かとは文字どおり「何か」であって、自分でもわからない。その苛立ちのために若者は腕くのだ。

そのようなわが子の姿をみて、親は困惑する。オロオロし、やがて何とかせねばならないと、いらいらする。しかし、そのような親の態度は禁物なのである。V・E・フランクはいった。「心に悩む人間は『苦悩する力』をもたねばならぬ。意味のある悩みをもつ人にふさわしい命令は『あえて苦悩をもて』である」と。

その苦悩の体験から、かれらは新しい自己を（いや、正しくは本来の自己を）、そして新しい世界をつかむのだ。

親に必要なのは唯ひとつ——わが子をあたたく見守るだけなのである。（ちなみに、漢字で「親」は「木の上に立って見る」と書く。それは子どもを見守っている姿をあらわしている。）

「あたたく見守るということとは？」ときかれれば、私はそれは子どもにとって家庭が心の安らぎの場になっていることだと、答えることにしている。「では、その条件は？」と重ねてきかれることが多い。わかりきったことであるが、両親が仲睦まじいことに尽きるのではなからうか。

そういえば、両親は大学を卒業したインテリで、どちらも子どもの教育には熱心なのに、相互に何かしっくりいっていないという場合、「蛹」からぬけ出た若者は、いつまでも強い不満を残すようである。とくに、乳幼児期から、間違った早期教育（即効型の、また子どもの成長発達のリズムを無視した教育のこと）をうけて育った若者の場合、この十五歳すぎたころに、その弊害が集約的にあらわれてくるという印象を、私はもつ（成長発達のリズムと教育（下）参照）。

両親が仲睦まじい関係にあるということは、もちろん愛情深いということに他ならないが、そういう家庭は穏やかなというか、落ちついた雰囲気につつまれ、家族は正気で生活し

ているものである。正気、で、というのは気狂いじみた刺激にふりまわされるということと正反対である。

ところがこういう家庭があるとすると。外からはジェット機の爆音、拡声機や自動車やオートバイの騒音が一日中、侵入してくるし、家のなかはなかで、ラジオやテレビはつけっぱなし——そのテレビはどぎついコマーションと、殺人場面をこれでもか、これでもかとうつす劇映画、愛憎葛藤だけの、何のストーリーもないドラマ、それに勝った負けたのスポーツばかり。そのうえ、実物である両親が顔をあわせればいつでもケンカ、不平不満のいがみあい……ときたら、果して若者たちはどうやって心の安らぎを得たらよいだろうか。そうして心身ともに疲労困憊しているところに、さらに両親から追討ちをかけるように、こまかいことまで、いちいち干渉されたら、どうだろう。まさに一触即発、かれらはカッとなつて、短絡行為をすることになるのではなからうか。

私は外国で生活した経験をもつが、文明の進んだ国では、幼稚園でも高校でも、瞑想するための部屋が設けられ、生徒たちはその窓のない、長椅子がおいてあるだけの部屋に、たったひとりで、一時間でも二時間でも、静かに心を休めてい

ることが多いことを知った。あるとき、アメリカのある高校で、校長先生とよもやま話をしていたとき、たまたまこの瞑想室のことが話題になったが、かれはこんな話をしてくれたことを、今思い出す。

——今、アメリカ合衆国はノーベル賞の受賞者の数は世界一多い反面、犯罪者やアル中患者が多いといつて、世の非難を浴びている。くわしく調べたわけではないが、学問的にも立派な業績をあげているだけではなく、人格面でも高貴な人物になっている人のなかには、高校時代に、よく瞑想室にいらっていたというのが多いが、逆に、瞑想室にいくどころか、ひまさえあれば、ジャズ音楽に浮かれ、なんでも騒々しいことの好きだった人は、社会に出てから、他者に迷惑をかける行為をする者が多いという印象をもつ。やはり、思春期ごろからは若者には、静かな雰囲気が必要である——と。

さらにこのことにつけ加えねばならないのは、今の若者たちが過してきた過去に、かれらが野や山にじかにふれたという原体験（テレビ、映画、漫画、それに、こ、と、ば、をとおしたものは映像体験となる。原体験とは異質）がすっぽりぬけ落ちていたという人が多いということである。そのためだろう、かれらには自然そのものへの畏敬の念というか、情感という

か、人間の潤いがないしは慈みといったものが、はなはだ希薄なのである。

私は、「幼虫」の時代から、自然ではなく、ことはや映画（テレビ）や機械音をたっぶり吸収してしまおうと、思春期以後になって、自然を見る目がにごってしまっているのではないかと、みている。

小林秀雄が『美を求めぬ心』のなかで、「ことばは眼の邪魔になるものです」と述べている。「たとえば、諸君が野原を歩いていて一輪の美しい花の咲いているのを見たとする。

見ると、それは葦の花だとわかる。何だ葦の花か、と思った瞬間に、諸君はもう花の形も色も見のを止めるでしょう。諸君は心の中でお喋りをしたのです。葦の花ということばが、諸君の心のうちに這入って来れば、諸君は、もう眼を閉じるのです」と。全くそのとおりだと思う。にもかかわらず、幼いときからことばの勉強が強いられている。わが子がことばが一つでも多くおぼえてほしいと、親は願う、そのうえ、自然のひとかけらもないコンクリートのうえで、映像と機械音だけにかこまれて大きくなっていく今の子どもたちの将来は、いっそう暗いのではないかと、杞憂される。

二十七歳ごろが危機だということ

頭脳のはたらきからみる限り、十八、九歳ごろから二十七歳ごろまでは、七十数年間の生涯のなかでも、もっとも生産的な時期だといえる。とくに理数系の方面で大きな業績をあげた人の多くは、この時期に、その萌芽が明確にみられることが多い。また、詩、小説、評論、絵画、音楽、演劇などの面で新境地をひらくのも、この年齢段階であることが多い。まさに「蝶」の時代というにふさわしい。

その柔軟でみずみずしい頭脳は相応きびしい鍛練にもたえうるし、また、この時期にこそ、おおいに鍛えるべきでもある。逆に、この時期に怠惰な生活にあけくれていると、せっかくのその人の才能も天分も、花ひらくことなく、中途半端な（いつも腰かけ的な）人間として生きていくことになる。

二十七歳ごろを成長発達の「節」として区分するのは、一般的にいえば、二つの理由による。一つは二十七歳ごろまでに大抵の若者（統計のうえでは、男子の七五％、女子の九五％）は結婚し、子どもをもつ、つまり親になるということ、もう一つは社会人としても職業に就いたかれらは軌道に入り、その仕事をもっとも快調にこなしているのが二十七歳ご

ろであるというのが、それである。

したがって、七十数年という「生涯」（という長さでいうと）の約三分の一のところにあたる二十七歳ごろは、すべての面で登り坂の最中にあるとみられやすい。

ところが、私が二十七歳ごろを一つの重要な「節」と考えるのは、この登り坂の最中にある前途有望な人たちのなかに、自分の将来に絶望し、いわゆる鬱状態に陥る人が少なからずいることに注目するからである。信頼のおける統計は、残念ながら手元にはないが、私が見聞するところ、二十七歳ごろが「鬱」のはじまる時期で、それがもつとも深刻になるのが三十三歳ごろであるというのは、間違いなくいえる。その理由は定かでないが、鬱状態に陥っている人たちの相談のつたり、文献で調べたりしてみると、かれらは「一流」といわれる大学を卒業し、その後も社会的にみて、なんの不満も見出せない地位についている場合が多いことがわかる。しかも、「一流」といわれる大学にはいたのであるから、頭脳はすぐれていたはずであるし（とはいっても、その場合の優秀さというのは頭の回転がはやいとか、巧みにきまっただ答をあてるといふ意味であるが）、そのための受験勉強にも熱心にとりくんだものと想像される。

ここに掲げるAさんの場合は、一つの例にすぎないが、かれは三、四歳ごろから教育熱心な母親の要求にしたがって、近所にある英才教育をめざした塾に通い、読み書き算数をはやくから教えることで有名な幼稚園を出て、小学校入学後、高校卒業まで、学校ではいつもトップクラスに属していたという。両親には口ごたえ一つしたことがない素直な子どもであったAさんは、望みどおりの「一流」大学を出て、大手の会社に入社したのは、今から五年前であった。そして、今は掛長の地位にある（何の不満もないようにみえる）中堅の一人となっているのに、半年ほど前から、夜間ときおりおそってくる頭痛に悩まされ、寝不足のために、朝起きが極端に悪いと訴えている。一昨年、同僚だった美人と結婚し、今は一子の父親になっているのに、家庭に帰っても心が安まらず、あの素直だったAさんは奥さんに八当りすることが多くなったのだ。会社の同期生は六十人ほどいたが、掛長の地位をえたのは、わずか七人しかいないのであるから、かれは前途を見込まれている一人であることがわかる。しかし、かれの頭痛の原因の一つは、いつも後輩からの追いあげと、さらに高い地位への目に見えない「這いあがり」競争のために、焦燥感が昂じ、毎日、緊張のしっぱなしであることが考えられ

る。そして、その緊張感から解放される日曜日には、ふつうは心がなごむものなのに、Aさんの場合は逆に、競争の渦中に生きる毎日の自分がよく見えてきて、やりきれなくなるといのである。同時に、いつかみんなに立ち遅れている自分の姿を想像し、愕然とすることがあるともいいう。

これはAさんに限ったことではないだろう。「地位」争奪戦のはげしい大手の会社や役所に勤める人たちは、たえず上司の評価を気にし、一刻も心が安まらないのである。その緊張疲れが、どっと出てくるのは二十七歳ごろだと、私は推察している。つまり、あまりに幼いときに、エネルギーを使いすぎて、肝心の働き盛りのときに、アゴを出したというべきか。そして、それを無理しつづけると、三十三歳ごろに、真性の鬱病にはまりこんでいく……。

女性の場合、それまで無我夢中で育児や家事にとりこんでいたのが、ふと一息ついて、自分の来し方行、末を思いめぐらす余裕ができるのが、三十三歳ごろである。

子どもは学校にあがり、夫も地位が安定し、さて自分自身の生き方を見つめようと思うのだが、自分には何も、ないことに、今さらながら驚いたという女性もいる。とくに、幼少期

から、何の不自由もなく、「蝶よ花よ」と育てられてきた女性が三十三歳ごろ（女性の厄年と一致する）に、一つの大きな転換期を迎えることは、昔も今もかわらないようである。

その点、かえって幼いときから苦勞を重ね、自分を見つめることの多かった人の場合は、この厄年をスムーズに通過すると、説く人もいる。その真偽を確認するためには、幼児期からの長期にわたる縦断的な研究が必要であろうが、それはともあれ、幼児期の（私のいう「幼虫」の時代の）生活体験なり、生き方なりが、十八、九歳以後の「蝶」の時代まで、何らかの形で影響を及ぼしていることは否定できないだろう。

さらに厳密にいうならば、誕生から三歳ごろまでの「卵」の時代の、養育者との人間的なかわりあい、その子どもの生涯のかなりの部分の基底要因となっているという仮説も、説得力をもつ。なぜならば、養育者が他者との競争にうちかつことで、子どもの幸せが実現するという考えをもつか、その人らしい生き方をするのがもっとも幸せだという思想をもつかということ、子どもへのかかわり方は、根本的に異なるからである。

では、子どもにとって、望ましい教育のあり方とは、どのようなものだろうか。|| 以下次号 ||

（神戸大学）